

教学の手引き

2011

日本文学専攻

文学部

Table of Contents

日本文学専攻

I 日本文学専攻 教学紹介

① 教育理念・目標	3
② 履修の仕方	4
③ 履修モデル	5
④ 科目概要	8
⑤ 研究入門 学習の具体的方法	12
⑥ 卒業論文 執筆の要項（巻末）	(1)

II 科目一覧と履修方法

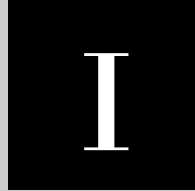
① 科目一覧	14
② 履修方法	15

「教学の手引き」の使い方

「教学の手引き」は、専攻・プログラムにおける皆さんの学びの指針となるものです。
毎年配布される履修要項とあわせて、履修に役立ててください。

この「教学の手引き」は、皆さんが卒業するまで使用するものです。
再配布はしませんので、大切に保管してください。

記載内容に変更・追加がある場合は文学部ホームページ（URL：http://www.ritsumeijp/lt/lt07_j.html）や掲示で随時発表しますので、定期的に確認をしてください。



日本文学専攻 教学紹介

1 教学理念・目標

文学部の教育研究上の目標として以下の6項目が掲げられていることは前に記してありますが、いま確認のためにこれらを再度掲げ、これらの事項を十分にふまえたうえでの日本文学専攻の教学目標を具体的に述べることにします。

- ①人間や世界の様々な文化について幅広い知識を身につけ、人文学の方法論を用いて理解することができる。
(知識・理解)
- ②現代・過去の社会や文化に対して多面的な関心を持ち、自らの見解を形成できる。(思考・判断)
- ③個人や文化の多様性を認め、社会の一員として主体的に行動できる。(思考・判断)
- ④人間や文化について関心を持ち、自らの力で課題を設定し探求する意欲を持つ。(関心・意欲)
- ⑤現代社会が抱える問題に対し、大学で学んだことをもとに解決しようとする態度を持つ。(態度)
- ⑥自分の調査・研究の結果を、口頭あるいは文章や制作物の形で表現することができる。(技能・表現)

日本文学の教学理念はその名称の通り、日本の文学を研究することを目標とするものです。しかしこれを子細に見た場合、「日本」をどう捉えるか、「文学」をいかに把握して研究するかが基本的には問われなければならないことです。本専攻では今日的な課題を背景にしつつ、国際化する中での日本文学を歴史的視野や空間的視野、さらには社会的視野などを研究方法に組み込むことを教学の基本と捉え、研究指導を展開しています。日本文学専攻の教学内容を具体的に示せば、「日本文学」と「日本語学」の二つの領域から構成されています。前者は古代から近現代の文学作品を研究対象にし、後者はさまざまな言語分野を含んだ研究方法があります。しかもこれらはお互いに孤立することなく、濃密に関わることによってより高度で確実な研究が進展するものです。さらには近年、広く関心を集め今後の研究進展が期待されている分野として、絵画、図像、映画、演劇などがあり、語学についても日本語を一つの言語学としてとらえる研究方法や日本語教育学などの分野もあります。日々進展しつつある研究に関心を持った学生諸君の知的欲求に確実に応え得るような人的、物的な配慮がなされていることから、図書館を始め諸施設を大いに活用し、知的活動に取り組んでほしいものです。研究は今日までの集積を積極的かつ能動的に学ぶところから始まることは勿論です。芭蕉の言う「不易流行」は学問研究の在り方の根幹にも通じています。テキスト中心の書誌的研究が「不易」ならば、文化・社会・歴史・民俗などの諸々の分野の研究成果に照らし合わせ新しい研究視点は「流行」とでも言えましょう。二つの概念に導かれることで得られる成果をより多様な媒体によって獲得し、さらにより高度な展望に仕組んでいく方途を模索するところに研究の醍醐味があると言えます。そのうえに自己の考えを確立させ、社会の一員として行動できる力の養成を掲げる本学部の教学理念があるのです。日本文学専攻の教学目標はこの文学部の教学理念を承けているものです。したがって本専攻での教学理念・目標は以下のように纏められましょう。

- ・日本文学・日本語学の専門的な知識を広い視野において獲得し、その概要を体系的に理解し、主体的に学ぶ力を養成します。
- ・学修によって得られた知識を活かして、自己をとりまく文化・社会・歴史的な動向に関心を持ち、適切な分析や認識ができる力をつけます。
- ・広く国際的視野に立って日本文学・日本語学を幅広く学び、それらを的確に把握する能力を身につけます。
- ・日本文学・日本語学で学んだ知識を創造的な態度でまとめ、主体的かつ的確に表現する能力を養成します。
- ・日本文学・日本語学で学んだ成果を他の学問領域に援用し発展させる能力や応用力を身につけます。

2 履修の仕方

4年間の履修は、低回生で広い分野にわたる基礎的・訓練的な科目をとり、次第に専門科目を増やし、最後の仕上げとして個別的・専門的な分野について卒業論文を作成することで終了します。

年次を具体的に追い、基幹となる専門科目をあげながら説明すると、次のようになります（各科目の内容については、次の[4]科目概要を見てください）。

1回生で古典分野の教材を対象に、文学研究の手法・態度を学ぶ「研究入門」を受講します。2回生では、同じく近代文学の教材を対象にした「基礎講読」に加え、古典・近代・語学の中から2分野を選択し、やや専門的に学ぶ「日本文学講読演習Ⅰ」又は「日本文化講読演習Ⅰ」をとります。3回生になると古典・近代・語学のうち1分野を選んで、専門的に学習する「日本文学講読演習Ⅱ」をとります。その基礎の上に4回生で「卒業論文」を作成します。

受講の仕方については、低回生の段階ではなるべく広い分野の科目をとり、体系的な知見を身につけ、その中で自分の興味・関心のある分野や問題を見だし、「講読演習Ⅰ・Ⅱ」でそれを深め、卒業論文でその個別分野について専門的に研究した成果とすることが大切です。近年は早くから近代か古典の分野を決め、偏った受講形態をとる学生が増えています。そうではなくて、将来の目標にむかって専門科目を選びながらも、低回生ではなるべく広く、次第に個別的な専門へ、そしてその仕上げの卒論へという受講が望ましいと考えます。基幹科目の受講方法はこのような構成になっています。

なお、この積み上げによる学習は、特定分野を直線的なかたちで学習・研究するだけでなく、古典・近現代・語学の3分野を行き来するかたちでも結構です。具体的には、「講読演習Ⅱ」と直接に関連する分野の卒業論文でなく、「講読演習Ⅰ」で学習したのと別の分野を深める卒業論文もあり得るのです。要は、各自の将来の目標にふさわしい学修形態を自ら選択し、広い知見のうえに専門的な分野を深めるかたちの長期計画が求められるのです。

この参考になるものに「履修モデル」があります。このモデルを参考にし、自分に合った形の学修を目指してください。

3 履修モデル

モデル1：日本文学専攻型

学年 科目区分	必修科目	登録必修科目	専攻科目	教養科目・他専攻・人文科学 総合講座等の科目	資格課程・副専攻等
1 回生		日本文学研究入門 日本文学概論Ⅰ・Ⅱ 日本文学史Ⅰ～Ⅳ 日本語学概論Ⅰ・Ⅱ (各科目の一部が登録 必修)	リテラシー入門 (教養) 日本文学概論Ⅰ・Ⅱ 日本文学史Ⅰ～Ⅳ 日本語学概論Ⅰ・Ⅱ (登録必修に加えて) 日本文化概論Ⅰ・Ⅱ	ジェンダー論(教養) 文学と社会(教養) 映像と表現(教養) メディアと現代文化(教養) アジアの文学(人文) 情報処理関係科目(教養) 西洋思想Ⅰ・Ⅱ(人文) 東洋思想Ⅰ・Ⅱ(人文)	教職科目
2 回生	日本文学/文化講 読演習Ⅰ (古典・近代・語学 から異分野を2科 目8単位。3回生 までに修得が望ま しい)	日本文学基礎講読	日本文学と子ども 日本文学と芸能・美術Ⅰ・Ⅱ 日本文学と儀礼・学問Ⅰ・Ⅱ 日本文学の伝統と現代Ⅰ・Ⅱ 日本文学と音楽 日本文学とメディア 日本文学と芸能・美術Ⅰ・Ⅱ 日本文学と知識人 日本文学とアジア (以上は3回生までにバラン スよく)	中国文学概論(中文) 民俗学(人文) 神話学(人文) 日本文化史(日本史) 仏教美術史(学際) 日本絵画史(学際) アカデミック・ライティング 人文科学のための情報処理(教養) (以上は3回生までにバラン スよく)	教職科目 国語科教育研究Ⅰ・Ⅱ(教職) 外国語コミュニケーション 科目(副)
3 回生		日本文学講読演習Ⅱ		京都学(教養) ジェンダーと文化(学際) 中国哲学史Ⅰ・Ⅱ(中文)	国語科授業研究(教職) 外国語コミュニケーション 科目(副)
4 回生	日本文学演習 卒業論文				

このモデルのテーマ：日本文学を軸とし、日本の文化・社会の諸相を幅広く勉強する。

凡例：教養科目(教養)；人文科学総合講座(人文)；学際プログラム(学際)；英米文学専攻(英米)；中国文学専攻(中文)など

モデル2：日本文化専攻型

学年 科目区分	必修科目	登録必修科目	リテラシー入門 (教養)	専攻科目	教養科目・他専攻・人文科学 総合講座等の科目	資格課程・副専攻等
1 回生		日本文学研究入門 日本文学概論Ⅰ・Ⅱ 日本文学史Ⅰ～Ⅳ 日本語学概論Ⅰ・Ⅱ (各科目の一部が登録 必修)		日本文学概論Ⅰ・Ⅱ 日本文学史Ⅰ～Ⅳ 日本語学概論Ⅰ・Ⅱ (登録必修に加えて) 日本文化概論Ⅰ・Ⅱ	ジェンダー論(教養) 文学と社会(教養) 映像と表現(教養) メディアと現代文化(教養) アジアの文学(人文) 情報処理関係科目(教養) 西洋思想Ⅰ・Ⅱ(人文)	教職科目 教職科目
2 回生	日本文学／文化講 読演習Ⅰ (古典・近代・語学 から異分野を2科 目8単位。3回生 までに修得が望ま しい)	日本文学基礎講読		日本文化講読演習Ⅰ 日本語と文化Ⅰ・Ⅱ 日本文学と女性 日本文学の伝統と現代Ⅰ・Ⅱ 日本文学とメディア 日本文学と芸能・美術Ⅰ・Ⅱ 日本文学と知識人 日本文学とアジア (以上は3回生までにバラン スよく)	メディアと現代文化(教養) 民間文芸学(人文) 神話学(人文) 日本演劇論(人文) 日本文化史(日本史) 中国文学概論(中文) 文化人類学(学際) 社会構造と文化(学際) アカデミック・ライティング 人文科学のための情報処理(教養) (以上は3回生までにバラン スよく)	教職科目 国語科教育研究Ⅰ・Ⅱ(教職) 外国語コミュニケーション 科目(副)
3 回生		日本文学講読演習Ⅱ			京都学(教養) 比較文学論Ⅰ・Ⅱ(学際) ジェンダーと文化(学際) 中国哲学史Ⅰ・Ⅱ(中文)	国語科授業研究(教職) 外国語コミュニケーション 科目(副)
4 回生	日本文学演習 卒業論文					

このモデルのテーマ：日本文学を軸にし、主として日本の文化を社会とその諸相との関係において勉強する。

凡例：教養科目(教養)；人文科学総合講座(人文)；学際プログラム(学際)；英米文学専攻(英米)；中国文学専攻(中文)など

モデル3：語学専攻型

学年	科目区分	必修科目	登録必修科目	リテラシー入門 (教養)	専攻科目	教養科目・他専攻・人文科学 総合講座等の科目	資格課程・副専攻等
1 年生			日本文学研究入門 日本文学概論Ⅰ・Ⅱ 日本文学史Ⅰ～Ⅳ 日本語学概論Ⅰ・Ⅱ (各科目の一部が登録 必修)	リテラシー入門 (教養)	日本文学概論Ⅰ・Ⅱ 日本文学史Ⅰ～Ⅳ 日本語学概論Ⅰ・Ⅱ (登録必修に加えて) 日本語文化概論Ⅰ・Ⅱ	論理と思考(教養) 文学と社会(教養) 現代の国際関係と日本(教養) 言語学Ⅰ・Ⅱ(人文) 音声学Ⅰ・Ⅱ(人文)	教職科目
2 年生		日本文学／文化講 読演習Ⅰ (古典・近代・語学 から異分野を2科 目8単位。3回生 までに修得が望ま しい)	日本文学基礎講読		日本語と文化Ⅰ・Ⅱ 日本語と社会Ⅰ・Ⅱ (以上は3回生までにバラン スよく)	情報処理関係科目(教養) 英語学概説(英米) 社会言語学Ⅰ・Ⅱ(人文) アカデミック・ライティング 人文科学のための情報処理(教養) (以上は3回生までにバラン スよく)	教職科目 国語科教育研究Ⅰ・Ⅱ(教職) 外国語コミュニケーション 科目(副) 日本語教育(イノベーシ ョン)
3 年生			日本文学講読演習Ⅱ			人文総合科学演習Ⅰ(学際・ 言語系) 社会構造と文化(学際) ジェンダーと文化(学際)	国語科授業研究(教職) 外国語コミュニケーション 科目(副) 日本語教育(イノベーシ ョン)
4 年生		日本文学演習 卒業論文					

このモデルのテーマ：日本語を軸とし、言葉と社会・文化の関係を中心に勉強する。

凡例：教養科目(教養)；人文科学総合講座(人文)；学際プログラム(学際)；英米文学専攻(英米)；中国文学専攻(中文)など

4 科目概要

1. 基幹科目

「日本文学研究入門」(コア科目 登録必修)

日本文学研究の入門として古典文学全般の基礎資料・文献や研究テーマ・方法などについて概説し、日本文学研究の基礎的学力を習得させることを目的とする。主として前期は講義形式、後期は上代から近世までの文学を対象として演習形式で行う。『ハンドブック古典文学』(立命館大学日本文学会編)を活用します。

「日本文学基礎講読」(コア科目 登録必修)

日本文学研究の発展として近代文学全般の基礎資料・文献や研究テーマ・方法などについて概説し、日本文学研究の基礎的学力を習得させることを目的とする。主として前期は講義形式、後期は近代文学を対象として演習形式で行う。『ハンドブック近現代文学』(立命館大学日本文学会編)を活用します。

「日本文学講読演習Ⅰ」「日本文化講読演習Ⅰ」(コア科目)

日本文学の上代から近代までの作品を対象として講読し、読解する学力を習得させることを目的とする。時代・領域・作家等、適切な作品や資料を選定して演習形式で行う。背景となる文学観や歴史観など専門的な文学史、場合によっては言語史も併せて把握させるものとする。

「日本文学講読演習Ⅱ」(コア科目 登録必修)

「日本文学研究入門」・「日本文学基礎講読」を踏まえ、発表や討議を通じて、研究文献や資料を検討し批判する視野を育成し、文学・言語の研究能力を深化させることを目的とする。作者・作家、作品やテーマを絞って演習形式で行う。

「日本文学演習」(コア科目 必修)

卒業論文を執筆する4年生を対象とした論文演習。各自の主題に沿った文献知識の習得から、論文執筆に至るまでの実習を目的とする。

「卒業論文」(必修)

小集団教育を軸とした日本文学の4年間の専門学習の到達点を集約させることを目的とする。

「テーマリサーチ型ゼミナール」

テーマリサーチ型ゼミナールは、2003年度からスタートした、文学部が擁する従来の枠組みでは捉えきれない人文学のあらたな分野やテーマ、アプローチを、ゼミ形式で大胆に実践していく新しい形態のゼミナールである。21世紀の「知」のグローバル化を目指して、人文学に共通する普遍的なテーマ、特定地域を多面的にリサーチしうるテーマ、現在進行形のタイムリーなテーマ、新世紀の社会に直結する実践・実習的テーマなど、現代社会が人文学に求める革新的テーマを設定している。また、テーマリサーチ型ゼミナールでは革新的・斬新なテーマを追求するためにも、常にゼミテーマを見つめ直している。3回生のゼミ選択の際には、卒業時(4回生)にどのようなテーマで研究をし、卒業論文執筆をしたいかといったことを考え、ゼミを選択する。その際、自専攻のゼミ、テーマリサーチ型ゼミナールといった選択肢の中で自分に適するゼミを選ぶ。

2011年度3回生ゼミテーマ

例)「説き方の表現と教育心理学」、「中国映画から現代中国の文化を考える」、「THEMES IN ASIAN STUDIES」

2. 準基幹科目

「日本文学概論Ⅰ」(コア科目 P.15参照)

日本文学全般の諸問題について総合的に講述し、日本文学研究の基礎的学力を習得させることを目的とする。日本文学のジャンルや時代・時期の問題について、文学発生・生成の母胎やその展開における他の芸術・芸能との関わり、時代の歴史・思想・文化や風土との関わりなどを説き、日本文学の特質を明らかにする。

「日本文学概論Ⅱ」(コア科目 P.15参照)

日本文学全般の諸問題について総合的に講述し、日本文学研究の基礎的学力を習得させることを目的とする。日本文学の研究方法及び研究史、文学の発生・生成における作者・作家と社会との関わりの問題や声・音・文字・印刷・電子メディアの問題、享受における読書・読者の問題などについて説き、日本文学の特徴を明らかにする。

「日本文学史Ⅰ」(コア科目 P.15参照)

日本文学の古典文学分野の歴史について講述し、日本文学の歴史を把握させることを目的とする。上代から近世までの日本文学の作品や作者・作家、表現や思想・美などについてその発生・成立と展開を説き、その歴史を明らかにする。

「日本文学史Ⅱ」(コア科目 P.15参照)

日本文学の古典文学分野の歴史について講述し、日本文学の歴史を把握させることを目的とする。上代から近世までの日本文学の作品や作者・作家、表現や思想・美などについて、その発生・成立と展開を説き、その歴史を明らかにする。「日本文学史Ⅰ」と異なる時代の問題を講述する。

「日本文学史Ⅲ」(コア科目 P.15参照)

日本文学の近代文学分野の歴史について講述し、日本文学の歴史を把握させることを目的とする。近代の日本文学の作品や作家、表現や思想・美、社会との関わりなどの変遷を説き、その歴史を明らかにする。

「日本文学史Ⅳ」(コア科目 P.15参照)

日本文学の近代文学分野の歴史について講述し、日本文学の歴史を把握させることを目的とする。近代の日本文学の作品や作家、表現や思想・美、社会との関わりなどの変遷を説き、その歴史を明らかにする。「日本文学史Ⅲ」と異なる時期の問題を講述する。

「日本語学概論Ⅰ」(コア科目 P.15参照)

古代から現代までの日本語の変遷の模様、また日本語の構造的な問題そのものについて講述し、日本語についての特徴を把握させることを目的とする。

「日本語学概論Ⅱ」(コア科目 P.15参照)

「概論Ⅰ」を深化させた形で日本語の構造と歴史また研究史について、やや具体的な問題を従来の研究成果にもとづいて講述する。

3. その他の科目

「日本文学とアジア」

日本文学の特殊講義として近代文学とアジアとの関わりをテーマに講述し、このテーマのもとに近代の日本文学の作家や作品を把握させることを目的とする。

「日本文学と知識人」

日本文学の特殊講義として近代文学と知識人との関わりをテーマに講述し、このテーマのもとに近代の日本文学の作家や作品を把握させることを目的とする。

「日本文学と女性」

日本文学の特殊講義として近代文学と女性との関わりをテーマに講述し、このテーマのもとに近代の日本文学の作家や作品を把握させることを目的とする。

「日本文学と子ども」

日本文学の特殊講義として近代文学と子どもとの関わりをテーマに講述し、このテーマのもとに近代の日本文学の作家や作品を把握させることを目的とする。

「日本文学と音楽」

日本文学の特殊講義として上代から近世までの日本文学と音楽との関わりをテーマに講述し、このテーマのもとに日本文学のジャンルや作品を把握させることを目的とする。

「日本文学とメディア」

日本文学の特殊講義として上代から近代までの日本文学と声・音・文字・印刷との関わりをテーマに講述し、このテーマのもとに日本文学のジャンルや作品を把握させることを目的とする。

「日本文学と儀礼・学問Ⅰ」

日本文学の特殊講義として上代から近世までの日本文学とその発生・生成の母胎である儀礼・学問の場との関わりをテーマに講述し、このテーマのもとに日本文学のジャンルや作品を把握させることを目的とする。

「日本文学と儀礼・学問Ⅱ」

日本文学の特殊講義として上代から近世までの日本文学と儀礼・学問の場との関わりをテーマに講述し、このテーマのもとに日本文学のジャンルや作品を把握させることを目的とする。「日本文学と儀礼・学問Ⅰ」と異なるジャンルや時代の問題を講述する。

「日本文学と芸能・美術Ⅰ」

日本文学の特殊講義として上代から近世までの日本文学と芸能・美術の世界との関わりをテーマに講述し、このテーマのもとに日本文学のジャンルや作品を把握させることを目的とする。

「日本文学と芸能・美術Ⅱ」

日本文学の特殊講義として上代から近世までの日本文学と芸能・美術の世界との関わりをテーマに講述し、このテーマのもとに日本文学のジャンルや作品を把握させることを目的とする。「日本文学と芸能・美術Ⅰ」と異なるジャンルや時代の問題を講述する。

「日本文学の伝統と現代Ⅰ」

日本文学の特殊講義として現代まで継承される日本文学の伝統をテーマに講述し、このテーマのもとに日本文学のジャンルや作品を把握させることを目的とする。

「日本文学の伝統と現代Ⅱ」

日本文学の特殊講義として現代まで継承される日本文学の伝統をテーマに講述し、このテーマのもとに日本文学のジャンルや作品を把握させることを目的とする。「日本文学の伝統と現代Ⅰ」と異なるジャンルや作品の問題を講述する。

「日本文化概論Ⅰ」

日本文学を文化のなかに位置づけて総合的に講述し、日本文化研究の基礎的学力を習得させることを目的とする。和歌・連歌・俳諧・物語などの文学ジャンルや作者・作品に着目しながら、日本文化の生成と展開について説き、日本文化の特質を明らかにする。

「日本文化概論Ⅱ」

日本文学を文化のなかに位置づけて総合的に講述し、日本文化研究の基礎的学力を習得させることを目的とする。和歌・連歌・俳諧・物語などの文学ジャンルや作者・作品に着目しながら、日本文化の生成と展開について説き、日本文化の特質を明らかにする。「日本文化概論Ⅰ」と異なるジャンルや時代の問題を講述する。

「日本文化特殊講義Ⅰ」

日本文学のジャンルや作者・作品が生成・展開してきた日本文化の世界の諸問題についてテーマ別に講述し、このテーマのもとに日本文化を把握させることを目的とする。

「日本文化特殊講義Ⅱ」

日本文学のジャンルや作者・作品が生成・展開してきた日本文化の世界の諸問題についてテーマ別に講述し、このテーマのもとに日本文化を把握させることを目的とする。「日本文化概論Ⅰ」と異なるテーマについて講述する。

「日本文化講読演習Ⅰ」

日本文学の和歌・連歌・俳諧・物語などの作品や資料を文化研究の観点から講読し、日本文化研究の基礎となる文献読解の学力を習得させることを目的とする。

「日本語と社会Ⅰ」

従来の言語学は共同体に共通の「言語」を想定し、その構造や変化を研究するものであった。しかし、言語は個性をもつ話し手・聞き手に担われ、さまざまな社会的な文脈の中で機能する実在体でもある。こうした日本語の多様な変種と荷い手の関係を、各種の研究を紹介し、場合によっては小調査による社会言語学的な観点を深める。

「日本語と社会Ⅱ」

「日本語と社会Ⅰ」を発展させ、今日的な言語の変種とその様々な模様をやや大量の言語調査を実施しながら実践的に学ぶ。標準語や各地方言の受け止められ方、今日問題になっているラ抜き言葉、敬語表現、依頼表現、婉曲表現、若者言葉などについて、言語の担い手の属性とこれらの関係のありかたを考察する。

「日本語と文化Ⅰ」

言語を構成する音韻・語彙・文法などの諸要素は、伝達の道具だけでなく社会的・文化的な価値をもって存在している。古く、固有の日本語が中国語の影響で音韻や語彙に変容を来したり、日本文化の発達にともなって表現法を拡張させたり、近代化の時期に漢語・外来語の語彙を大幅に増加させたり、マスコミュニケーションの拡大のために共通語が生まれたりしたのはその例である。そうした研究を紹介しながら言語と文化とのさまざまな関わりを考える。

「日本語と文化Ⅱ」

「日本語と文化Ⅰ」の発展として、具体的な問題を実際の調査をまじえて考察する。日本語史での表現法の変化にともなう係り結び表現の変容、活用形態の整理、貴族から武家社会への転換にともなう語彙・文体の変化および日本語研究の特色、近世の学問文化の広がりや日本語の拡張、外来文化の受容と近代語の変化などについて考察する。

「日本演劇論」

日本の古代から現代までの演劇世界を対象にその演劇の変遷や機能などの諸問題を講述し、ことばと演技と音楽・舞台装置による総合芸術としての日本演劇の特質を把握させることを目的とする。

4. 人文科学総合講座

「民間文芸学」

伝承文芸の世界について、ジャンルと系統、発生と伝承、伝播と変容、伝承者、伝承の機会などの諸問題を講述し、文字文学の世界と異なる声の文学の特質を把握させることを目的とする。

⑤ 研究入門 学習の具体的方法

1. どう学ぶか——図書館・文献資料室

日本文学の場合、幸いなことに研究対象のテキスト・資料の多くは日本国内にあるので、必要とするものの大部分を実際に取得したり図書館等で閲覧することが可能です。その意味で本の所在を知ること、資料の保管場所を熟知しておくことが研究の初歩かつ最も大切な要件になります。その第一歩として、本学、立命館大学の図書館や共同研究室の使用方法を周知し、実際に利用してください。本の検索方法等図書館の利用方法についてはリテラシー入門において説明しますので、しっかりと習得してください。また文学部事務室のある清心館の東側の修学館地下には人文系の資料を収めた文献資料室があります。「研究入門」を始めとする授業で必要な資料は、まずこの二ヶ所で検索することになります。

2. 学ぶためのサポート——共同研究室、学習の手引き

古典文学研究のためには、古典籍にふれたり、草書体の仮名文（くずし字）を解読することが必要になります。また、研究発表や講義・演習発表のための要旨や資料（「レジュメ」と言います）の作成にも時間が費やされます。もちろん個人の努力が不可欠ですが、学術研究上の質問がある場合清心館3階の日本文学共同研究室に定期的にいる助教及びTA（ティーチングアシスタント）に問い合わせてください。また、本学大学院の学生で研究者を目指している先輩に質問することも可能です。新年度ガイダンスで紹介します。共同研究室設置の目的や使用方法是別紙にて配布し、授業中にガイダンスをおこないます。また立命館大学日本文学会編『ハンドブック古典編』・同『近現代編』や「学習の手引き」も勉学の具体的な助けとなるでしょう。

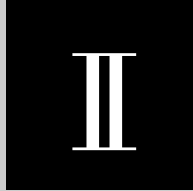
3. 学問の可能性

文学研究を有効に行うために、何らかの目的を設定することが大切です。たとえば外国人に日本語を教授するという目的意識があれば、日本語学（国語学）の文法研究の方法は間違いなく多様化するでしょう。あるいは、これまで文学研究とは無縁と考えられていた分野に文学的手段を援用する可能性を見出していくのも文学部学生の醍醐味です。そのための実験的プログラムの一つにインターンシップがあります。これは、企業や自治体と大学が協同で立ち上げた新たな相互学術プログラムで、これまでの人文系学問の枠組みを大きく広げる可能性が期待されています。また、テーマリサーチゼミにも積極的に参加されることを望みます。こうした情報についても授業の中で提供していきますので、積極的に活用し、広い視野と貴重な体験を研究に活かしてください。将来の進路を踏まえての研究方法の開拓は興味深い作業になります。

4. その他

これまでに述べてきた他に、日本文学専攻では以下のような研究教育活動を行っています。

- ① 教員・卒業生・在学生を主会員とする、日本文学（国文学）・日本語学（国語学）・国語教育関係の学術団体である立命館大学日本文学会を組織し、大会・国語教育ゼミナール（年2回）・研究例会（年3回）・日本文学研修旅行などを企画・実施することで、研究・教育レベルの向上に努めています。同会では年2回、機関紙「論究日本文学」を刊行し、研究成果を公開しています。また、学部生を中心に学生会が運営され、各時代（ジャンル別）に定期的に研究会を行っています。興味のある学生は共同研究室の掲示を見てください。
- ② 専攻ホームページを公開し、上記の「論究日本文学」や専攻教学内容等を発信しています。
この他にも、全国学会や研究会の開催等、学界動向と直結した研究拠点の一つであることを自覚しつつ、教員一同、日常の研究・教育活動を行っています。



科目一覧と履修方法

1 科目一覧

日本文学専攻全回生

	1 回生	2 回生	3 回生	4 回生
概 論	日本文学概論Ⅰ・Ⅱ(各2) 日本語学概論Ⅰ・Ⅱ(各2) 日本語文化概論Ⅰ・Ⅱ(各2) 日本文化概論Ⅰ・Ⅱ(各2)			
文 学 史	日本文学史Ⅰ～Ⅳ(各2)			
特殊講義系		日本語と社会Ⅰ・Ⅱ(各2) 日本語と文化Ⅰ・Ⅱ(各2) 日本文学とアジア(2) 日本文学と知識人(2) 日本文学と女性(2) 日本文学と子ども(2) 日本文学と儀礼・学問Ⅰ・Ⅱ(各2) 日本文学と芸能・美術Ⅰ・Ⅱ(各2) 日本文学の伝統と現代Ⅰ・Ⅱ(各2) 日本文学と音楽(2) 日本文学とメディア(2) #日本文化特殊講義Ⅰ・Ⅱ(各2)		
講 読		*#日本文学講読演習Ⅰ(4)：通年 *#日本文化講読演習Ⅰ(4)：通年		
小 集 団	* <u>日本文学研究入門(4)</u> ：通年	* <u>日本文学基礎講読(4)</u> ：通年	# <u>日本文学講読演習Ⅱ(4)</u> ：通年	#日本文学演習(4)：通年 *卒業論文(4)：通年

1. 科目名のカッコ内数字は単位数を示します。
2. *のついた科目は、日本文学専攻の学生のみが受講できます。
3. #のついた科目は、重複受講ができます。
4. 下線のついた科目は、その回生でしか受講できません。

2 履修方法

必修科目 (卒業するために必ず単位を修得しなければならない科目)

①	日本文学講読演習Ⅰ (2回生以上) 日本文化講読演習Ⅰ (2回生以上)	2科目 8単位必修
②	日本文学演習 (4回生以上) ゼミナールⅡ (テーマリサーチ)	4単位選択必修
③	卒業論文 (4回生以上)	4単位必修

登録必修科目 (必ず登録・受講しなければならない科目)

④	日本文学概論Ⅰ・Ⅱ (1回生以上)	1科目 2単位選択
⑤	日本語学概論Ⅰ・Ⅱ (1回生以上)	1科目 2単位選択
⑥	日本文学史Ⅰ～Ⅳ (1回生以上)	2科目 4単位選択
⑦	日本文学研究入門 (1回生のみ)	1科目 4単位
⑧	日本文学基礎講読 (2回生のみ)	1科目 4単位
⑨	日本文学講読演習Ⅱ (3回生のみ) ゼミナールⅠ (テーマリサーチ) (3回生のみ)	1科目 4単位選択

専攻科目以外の登録必修科目

- ・リテラシー入門 (教養科目：2単位) 1回生前期
- ・外国文化講読 (英語) (人文科学総合講座：4単位) 3回生通年 ※2008年度以前入学生のみ

※社会人学生の皆さんは、②③以外の必修科目、および登録必修科目はありません。
ただし、条件の許す限り、上記の必修・登録必修科目は履修してください。

受講登録方法は履修要項を参照してください。

[学部共通]

卒業論文提出までの手続きについては履修要項の「『卒業論文』の提出について」を参照してください。

テーマリサーチ型ゼミナールにおける卒業論文（卒論形式・非卒論形式）の提出について

テーマリサーチ型ゼミナールでは、従来のような卒業論文の提出（卒論形式）もありますが、クラスによっては、卒論形式に代えて、共同で制作物（成果物）を仕上げて提出する「非卒論形式」もあります。必ずクラス内で担当教員に、いずれかの形式なのかを確認してから作成してください。

◆体裁について

卒論形式で制作の場合	文書体裁	字数：12,000字以上20,000字以下 英文の場合：65ストローク×25行、A4用紙15枚以上30枚以下 ファイル形式・書式・用紙の大きさなど：クラス担当者の指示に従うこと。 必ず 2部 提出すること。添付資料がある場合は、添付資料も同様に必ず 2部 提出すること。
	表紙等に関する体裁	題目、学生証番号、専攻、プログラム、氏名を必ず記載すること。
	その他の注意	学生本人のみの執筆による単著であること。共同執筆の類はこれに該当しない。
非卒論形式で制作の場合	文書・表紙体裁	体裁についてはクラス担当者の指示に従うこと。 必ず 2部 提出すること。添付資料がある場合は、添付資料も同様に必ず 2部 提出すること。
	その他の注意	1. 制作物（成果物）には題目、学生証番号、専攻・プログラム、氏名を必ず記載するか添付すること。また、審査教員シールを貼付すること（貼付箇所は自由）。 2. 制作物（成果物）とともに、4,000字以上の個人レポートを提出すること。 ※制作物（成果物）と個人レポートの両方を提出して初めて「卒論提出」となる。 ※個人レポートの表紙裏にも審査教員シールを貼付すること。 3. 口頭試問に相当するものとして、「卒業制作発表会（仮称）」を実施することがある。実施日については、担当教員の指示に従うこと。

◆上記の他の提出に関する諸注意は基本的に履修要項の「『卒業論文』の提出について」に従ってください。

一、卒業論文の位置

卒業論文は、研究入門から基礎講読を経て演習にいたる一連の学習で身につけた知識と方法を活用し、各人の具体的な研究テーマを自分の力で掘り下げ究明して、その成果をまとめるものである。従来の研究成果をよく踏まえたいうで、批判的な態度でこれに新しい知見を加えることが期待される。

二、論述の態度

自分の考えを他の人に伝えるために寄りどころとなる的確な根拠を提示し、論理的な文章展開で読み手を導くように分かりやすく説明することが大切である。

書誌や先行研究、あるいは研究史などそれらの成果も簡潔に紹介し、同時にその問題点をあげ、それと自己の考えとを対照させて論述するのもよい。この時、特に大切なのは他人の説や用例と自分が考えたり見つけたそれとの区別が明確に分かるように記述することである。

ことさら難しい術語を使ったり、奇をてらった文体や展開は避けるのが望ましい。新しい用語や特有の表現などがどうしても必要な場合は、自分なりの定義や説明を注等で示しておく。関連分野の論文も参考になる。

三、研究の方法

今までの学習で修得した方法を応用すればよい。

要するに、作品・資料の熟読、関連する先行研究の批判的摂取、これらを通じての自分なりの問題の発見、そしてその解決法を探り、論を立てる。そして、それらの分析・考察を理解してもらえよう論理的な文章でまとめることが重要である。

作品・資料の理解・把握については、現代的視点や今の自分の立場も大事だが、その時代・その作者の考えや感覚を理解する方向で行うことが肝要である。そのうえで、自らの論考を練り上げていくよう努めることが求められる。

また、関連する研究ばかり集めて振り回され、肝心の直接的な作品・資料の読みがおろそかになることは避けるべきである。直接的な対象を熟読玩味し、関連する研究によってこれを補い、またさまざまな解釈のあることを知り、批判的な態度で自分の見方や考えを深めていくのがよい。

四、具体的な諸点

(1) 異本・諸版の問題

文学・語学の研究資料には、異本や複数の版の問題がつきものである。原典に戻る方向で処理するか異本を積極的に活用するかは、研究の目的によって異なるが、その存在には注意が必要である。諸版については『国書総目録』、『古典籍総合目録』などで調べたり、異本関係を把握できる資料（例えば『源氏物語大成』など）を活用したり、必要ならば自分で作ったりするとよい。本文批判が研究の基礎を作る。

(2) 注釈書の問題

日本文学、とくに古典には古くから多くの注釈書が作られている。近代のものは比較的少ないが、各種研究論文にはこれを巡る諸説に触れるものも多い。現代に刊行されたものを含めて、これらにひととおり目を通しておくことが大切である。古いものでも研究のヒントを得ることが多いし、研究史の把握にもなる。最近、各種の古注釈が活字で刊行されている。近代については、各種の研究叢書・論文がこの役割を果たすだろう。

(3) 従来の研究成果の概観

まず、『日本古典文学大辞典』（岩波書店）、『日本近代文学大事典』（講談社）や各種文学事典を手がかりにするとともに、『日本古典文学研究史大事典』（勉誠出版）、日本文学全体を通した『日本文学全史』（全六巻・學燈社）、『日本文学研究資料叢書』（有精堂）や『研究資料日本古典文学 同・現代日本文学』（明治書院）、『国語国文研究史大成』（三省堂）、『日本近代文学大系』（角川書店）などが参考になる。「国文学 解釈と鑑賞」（至文堂）、「文学」（岩波書店）「日本語学」や、二〇〇九年七月号をもって休刊した「国文学 解釈と教材の研究」（學燈社）などの雑誌や各種の講座もある。

(4) 関連研究を探す

関連する内容の研究を探す必要性は高い。図書館のCD-ROM端末にある、『雑誌記事索引』はオンラインで情報が簡単に入手できる。日本文学（国文学）では、『国文学年鑑』（至文堂）、『国文学文献』（朋文出版）、『国文学年次別論文集』（学術文献刊行会）、日本語学（国語学）では、『国語年鑑』（秀英出版）『国文学年次別論文集』（学術文献刊行会）『日本語研究文献目録』（フロッピー版、同）などがある。また、『国文学論説資料集』『日本語学論説資料集』は手に入りにくい論文も収録されていて便利である。

この他に、関連論文の注などを活用して見つけることも出来る。ただ、目に触れにくいところにも参考にすべき貴重な研究資料があるので細心の注意が必要である。国文学研究資料館、国立国語研究所のホームページにも文献検索、作品資料のデジタル媒体などがある。

(5) オリジナルな研究資料の作成

各人の研究課題や方法にあった研究材料の活かし方を工夫することが大切である。

古典・近代を問わず、作家の年譜を作ったり、研究論文リストを作ったり、諸説・異説を集めたもの、また自分の考えをまとめたものを個別に準備するとよい。これらは散逸しないように（適宜に加筆・修正が可能ないように）、順を変えたり並べたりして比較・対照できるように、関連事項がすぐ参照できるよ

うに)、論文執筆の時に傍らにおいて直接利用できるように、ノートやカード作成時に工夫をするとよい。

五、執筆要領と注意事項…次の構成は一例である。くわしくは指導教員の指示に従うこと。

(1) 構成について(例として)

目次 (頁をかえて始める)

*目次とそれぞれのページを示す。

序論(「序」「はじめに」など)

*論の目的、視点、関連する研究の現況と自己の論との関係などを述べる。

第一章 (章と章との間は一、二行あける)

一 (節) …… (節と節との間は一行あけてもよい)

二 (節) ……

第二章

一

二

結論(「結」「おわりに」など)

補注(参考資料、補説など)

引用・参考文献一覧

(2)「注」について(自分の意見と先行研究で言われている事の区別がきわめて重要である)

他人の説による箇所やその引用の部分、出典その他補足説明的な箇所に付ける。本文中の余白右側、注の対象となる部分の末尾近辺に「(注) 1、2、……」と記し、論文末に一括掲載するか、脚注形式として記す。補注は全体を二字下げて書く。

(6) 用字、仮名遣いなど

誤字・脱字・略字のないように注意する。用字・仮名遣いなどは、常用漢字・現代仮名遣いなど現行のものを原則とする。特殊な表現や用語は、避けるのが望ましい。

(7) その他

- 1、口頭試問は、一月下旬から二月中旬に行う。提出論文のコピーを必ず持参すること。
- 2、論文は卒業式当日に返却する。

その他、詳細は指導教員の指示に従うこと。

〔書式〕

【日本文学専攻・卒業論文の提出にあたり、以下の点に十分気をつけること】

- ① 必ず所定の表紙を用いること。表紙はA4の黒色のもの―生協にて販売―を使用。縦書きを原則とするが、内容によっては横書きも可とする。その体裁は縦書きの場合に準じたものとするが、詳細は指導教員と相談すること。
- ② 縦書き用の表紙を用いる際は、用紙の向きも縦方向を原則とする。詳細は指導教員と相談すること。
- ③ 表紙には、必ず所定のシール―生協にて販売―を張り付けること。
- ④ 提出期限に遅れないこと。完成原稿として、オリジナル論文一部、そのコピー―一部の合計二部を提出する。二部とも、表紙とシールを用意する。いと。
- ⑤ 論文に添付資料を用いる場合、詳細を指導教員と相談すること。
- ⑥ 枚数制限・補注・書式の細部については、提出形式に応じて以下を参考にすること。

・手書き（原稿用紙）の場合の注意点

- ⑦ 原稿用紙は「立命館大学論文用紙」（A4縦書き）―生協にて販売―を使用。
- ⑧ 枚数は四〇〇字詰め原稿用紙にして三〇枚以上、五〇枚以下を原則とする。これには、補注・参考文献一覧・図表の綴じ込みなどは含まない。枚数などについて質問がある場合、指導教員に相談すること。
- ⑨ 図表などは原稿用紙に直接書いても、別紙に書いて張り付けてもよい。小さい図表は本文内の頁に加えてもよい。

・パソコン（Word文書など）の場合の注意点

- ⑦ 用紙はA4用紙を使用。A4用紙一枚につき、一行四〇字×二〇行又は三〇行（二ページにつき八〇〇字又は一二〇〇字）。原則として縦書き、場合によっては横書きでもよい。用紙の向きは縦向き（右辺∥長辺綴じ）を原則とするが、書式の細部に関しては必ず指導教員の指示に従うこと。
- ⑧ 枚数について。原稿用紙にして三〇枚以上、五〇枚以下は一二〇〇字～二〇〇〇字であるから、一枚八〇〇字の場合で、一五～二五枚となる。ただし、改行や空白を含めると、論文の文字数と用紙枚数には差が生じるので、どちらを重視するかは指導教員に相談すること。
- ⑨ 表紙をつけることを考慮し、十分な余白とること。
- *余白（例） 一〇・五ポイントのフォントを使用する場合の余白は、上下各70ミリ程度、左右各20～30ミリ程度とする。これは一例であり、適宜、見やすいよう工夫すること。
- ⑩ 注は論文末にまとめるか、それぞれのページの下部に脚注として記す。
- ⑪ 手書き同様に、原稿用紙に印字したのもも認める。その場合、原稿用紙の書式に従うこと。
- ⑫ 提出メ切について、パソコンによる作成の場合は、機器の故障などによって提出できなかった場合も一切理由にならないので、余裕を持って完成させること。

